

成人向

# SSS リーダー敗北

フルHDサイズ 文章付 CG集

死後の世界  
二度と死ぬことがない世界の戦線



戦闘に敗北し、**気絶したリーダー**

居合わせた隊員は意識のない彼女を...

**オシマツオシマ**

# SSSリーダー敗北




(注意事項)

- この作品は18歳未満閲覧禁止です。
- この作品の内容は全てフィクションであり、実在するものとは一切関係ありません。
- この作品の登場人物は全て成人しており、未成年者はありません。
- この作品は個人でお楽しみいただくものです、公開や他者への映示・譲渡等はしないで下さい。
- この作品の内容に含まれる犯罪や危険な行為を現実に行うことは一部であっても絶対にお止め下さい。

(免責)

- この作品のデータを実行・閲覧することにより、いかなる不具合・損害等が発生したとしても作者は一切の責任を負いません。

ここは若くして理不尽な死を迎えた者が死後に訪れる世界。  
全寮制学園を模したこの世界で人は二度と死ぬことがなく歳もとらない。



一見して天国のようなこの世界に送り込まれた者は  
ここでの学園生活を満喫することができるが、  
満足した者はこの世界を去る（成仏?）ことになる。  
そんな世界での話・・・

この世界で満足できる日々を過ごすことが成仏だとしても、ここに存在している以上は消え去ることを拒む者も居る。輪廻に確証はなく、次の世界があるのかもわからないのだから・

この世界から消え去ることを拒む者達が集まって運命に抗う活動をしているのが俺達の組織（死ん〇世界戦線）、世界に馴染まず秩序を乱すことで存在し続けようとしている。

死ん〇世界戦線は通称ゆりっぺと呼ばれるリーダーを中心として表立った活動を行う数十人の主力メンバーと

地下に潜り武器等の製作を受け持つ多数のメンバーで構成されている。

ちなみに俺は武器製作で主力を支援している裏方のメンバー、目立たない下っ端だが戦線の活動を支える柱だと思っている。



ゆりっぺは勝気で強引な性格だが頼りになるリーダーだ、突然この世界にやって来て戸惑う俺達を導いてくれている。

彼女に惹かれてこの活動をしているメンバーも多いだろう（特に男は）

俺などは彼女の為なら死んでもいいとさえ思っている、ま、この世界で死ぬことはないんだけど。

だが、そんな俺達に敵対する者もいる。

それは天使と呼ばれている少女、秩序を守らせようとする存在だ。俺達と天使は戦闘している、だから戦線なのだ。

・死ん〇世界戦線は日々激戦を繰り広げている。

この世界での戦闘は熾烈だ、何をしても死なないことを前提に  
お互い武器を持って殺し合う。



この日の戦闘で俺達は追い詰められていた、  
地下にある武器製作施設まで天使に潜入されたのだ。  
戦線メンバーはことごとく倒され  
主力で残っているのはゆりっぺと数名のみ・・・  
ここを天使に抑えられれば  
武器の供給がままならなくなる。

ちっ、こんな  
とこまで・・・

ここは  
マズイわっ

何としても  
死守よっ！



必死の抵抗を試みるが天使を止められない、メンバーが次々と倒され我が戦線は窮地に陥っている。普段は戦闘に参加しない俺達作業員も支援に駆けつけたが劣勢を覆すことはできなかった。激しい戦闘の末・・・ついにゆりっぺまでもが倒されてしまう。

リーダーを失っては勝敗が決したに等しい。天使のこれ以上の侵入を防がなければならぬが万事休すだ、残った者は途方にくれるしかなかった・・・



しかし天使はこれ以上侵入してはこなかった、  
ゆりっぺが倒され急速に戦意の衰えた俺達を無視して立ち去ったのだ。  
天使の行動は読めないことが多く何故かはわからないのだが・  
とにかく今回は助かったということになった。

この場で生き残ったのは俺と

同じ武器製作メンバーであるもう一人の男の二人だけ。

本来であれば俺達が盾となって

ゆりっぺを守るはずが不甲斐ない結果になってしまった。

俺「スマンっ、ゆりっぺ」


ゆりっぺの傷は普通であれば致命傷だが俺達が慌てることはない、

この世界で人が死ぬことはないからだ。

ゆりっぺも他のメンバーも数時間後には

怪我は完全に癒えて意識を取り戻す、

それがこの世界の理で俺達は何度もこんなことを繰り返している。



気絶したゆりっぺを眺めているのも失礼な気がした俺は  
この場を立ち去ろうとしたが、もう一人の男が俺を呼び止める。

男「なあ、これってチャンスじゃねえか？」

俺を引き留めたヤツはゆりっぺのスカートを捲し上げた。

驚いた俺は咄嗟に視線を逸らす・・・というのは嘘で凝視してしまった、ヤツの言いたいことは瞬時に理解できた。

男「意識があるのは俺とオマエだけ、何したってバレねえ」

事も無げにヤツは言うが・・・それって・・・ゴクツ、辺りを見渡して再びゆりっぺの下半身を凝視する。

俺は少なからずゆりっぺに好意を抱いている・・・当然触ってもみたい・・・だがそれは・・・ええっ？

男「ここじゃ落ちつかねえから奥に運ぼう、手伝えっ」

俺の視線が釘付けになっていたので同意したと見なしたのだろう。

俺は困惑していた、

戸惑いはあるが明確に拒否するのはあまりに勿体無い気がする・・・






結局、ヤツに促されるまま運ぶの手伝ってしまった。  
入り組んだ地下通路の奥で今は使われていない小部屋、  
ここなら人目に付くことはない。

俺の手は汗ばみ鼓動は尋常でなく高鳴っている、緊張の為だ。  
運ぶ為に初めて彼女に触れたときはそれこそ早鐘のように高鳴った、  
俺にとってゆりっぺは高嶺の花的な存在で  
大袈裟に言う touch ことすら畏れ多いといった感じなのだ。



しかし、これだけ条件の揃ったチャンスが減多にないのも確かだ。  
俺「.....」  
男「よし、ここなら誰も来ないだろ、さっそく始めるぞ」



ゆりっぺを抱きかかえたヤツが彼女の上着ファスナーを下ろすと  
それだけで胸が露になった、戦闘でブラジャーは千切れていたようだ。  
俺「んっ！」  
いきなりの生乳に俺は鼻血が出そうになる。

傷については外見上はもう治癒しているようだ、  
白い肌が眩しくさえ思える。



どきまぎしながらも視線を外せない俺の様子を見てヤツが言う。  
男「どうした、女の胸がそんなに珍しいか？」  
なんなら記念撮影でもしたらどうだ」  
ふざけやがって、バカにされて頭にきたが今はそれどころではない。  
それにしてもコイツはゆりっべに対する敬意が足りないようだ。  
戦線メンパーになって日が浅い為かもしれない。  
後日ゆりっべの素晴らしさについてたっぶり語ってやらなければ。

俺の憤りなど無視してヤツはゆりっぺの胸を遠慮なしに揉む。  
男「へへ、小ぶりだがいい感じだぜ、オマエも触ってみるよ」  
躊躇するあまりヤツに先をこされたがここまでくれば後には引けない、  
俺もゆりっぺの胸を・・





俺「ゴクッ・・」  
間近まで歩み寄った俺は思わず生唾を飲む。



汗ばんだ手でゆりっぺの胸に触れる。  
俺「柔らけえ・・・」  
思わず素直な感想が口をついて出てしまった。

二人してゆりつべの胸を揉みほぐして弄ぶ。  
この柔らかな膨らみの前で言葉はいらない、  
無言の二人はニヤつきながら極上の感触を楽しんでいた。



ヤツが乳首を口に含む、また先をこされた・  
舐める行為まで先手をとられてしまった。








俺も負けじと乳首にしゃぶりつく、  
女の子らしい甘い香りと僅かに塩気を含んだような味がする。  
プニプニした乳首を舌先で転がすように舐め回すと  
急速に硬くなりコロコロとした舌触りに変わっていくのがわかった。




俺は口を離してゆりつべの乳首を視認した、確かに勃起している。  
もう一方の乳房を弄んでいるヤツも感嘆の様子だ。  
男「もう乳首が起ってやがる、感度も良好だな」



刺激を与えれば乳首が勃起するのは当然の生理現象かもしれないが  
自分の行為でゆりつべを性的興奮させたのが無性に嬉しかった。  
俺は彼女の乳首を摘んだり引っ張ったりして無邪気に喜んだ。



ゆりっぺの乳首に執心していた俺に呆れた様子のヤツが促す。  
男「ほら、胸ほつきり触ってねえでさっさと脱がしちまおう」  
スカートをヒラヒラさせながら言う。  
男「オマエは下を脱がせよ」



二人してゆりっぺの服を脱がせていく。

ヤツが上半身を脱がせる間に俺はスカートのフックの位置を探る、手が震えそうだが、鼓動はまたヤバイくらい高鳴っている。

ぎこちない手つきでスカートを下ろすと・・・

目の前にはパンティ一枚だけになったゆりっぺの下半身が晒される。

俺「っ・・・」

緊張と興奮で思わず息を呑んだ俺がチラリとヤツの顔を見ると早くしろと言わんばかりの顔つきで見下ろしている。

意を決した俺はパンティに手をかけ一気に摺り下ろす。

俺「.....」

見えたっ、と言うか見てしまった、それもまじまじと、  
ゆりっぺの秘部である股間を直視した俺は感動したと言ってもいい。

ズルッ





くはぁっ

遠慮ないヤツの手がゆりっぺの股間を這い、女性器を広げて見せる。  
俺「う・わ・わ・わ」  
中身まで見えちゃってるよ・気絶顔との対比がエロいつ。  
男「どうだ、キレイか？」  
キレイかと聞かれても基準がわからないので答えようないが  
初々しい感じがするのでキレイなだろう。

男「眺めてないで触ってみろよ」  
俺「お、おう・・・」

憧れた女性の秘部を目の前にして俺は・・・意外と冷静でいられた。  
相変わらず鼓動は高鳴っているが  
取り乱したり怖気づいたりすることはなく自然に指を挿し入れた。





ゆりっぺの膣内は柔らかくて、何と言うか・温かかった、  
僅かに湿り気がありヌメツとした感触。  
指の動きで湿り気が増した、抜いた指は少し濡れている。

1=5ヤ




興奮の高まりを感じた俺は  
ゆりつべの股間を引き寄せてむしゃぶりついた。  
今までとは少し次元の違う強い性的興奮だ。

ぐい

男「おっ、ヤル気が出てきたか？」  
俺の積極的行動をヤツは歓迎しているようだ。

ぐい  
ぐい




体勢を変えようということになり俺は舐めるのを中断させられた、正直言うと邪魔されたような気分だが仕方あるまい。

ゆりつべの股間からは粘液が糸を引いている。これは俺の唾液ばかりではない、ゆりつべが俺に舐められて股間を濡らしているのだ。そう考えると益々興奮した。



俺はゆりっぺの股間を舐めるのに夢中になっていた。  
ふと気付くと、ヤツはいつの間にかズボンを脱ぎ捨て、  
ゆりっぺの口を開かせようとしている。  
俺「！」  
当然の流れかもしれないが、この後のことを深く考えていなかった俺は  
ヤツが勃起した股間を曝け出しているのを見て・正直言ってビビった。  
俺達はとんでもないことをしてるんじゃないだろうか？



ヤツの股間を目の当たりにして俺の舌の動きは鈍っていった。

・・・このまま続けていいのか？

もしこんなことしたのがバレたらどうなる？

たとえば急にゆりっぺが意識を取り戻したらどうする？

深い傷だったが回復時間には個人差がある、

思っているより早く目覚めることがあり得るかも・・・？

そうでなくても後々にバレないとは限らないのでは・・・？

ネガティブな考えが頭に浮かび背筋が寒くなる、

今までの興奮も急速に冷めていった。

俺とは裏腹にヤツのテンションは急上昇しているようだ。

男「ははっ、サイコー、ゆりっぺに啜えさせたぜっ！」



男「おいっ、もういいんじゃないか?」  
ハイテンションになったヤツが俺の頭を押し退けた、  
ゆりっぺの股間に指を突っ込み確認する。  
男「もうグチョグチョじゃねか、さっさとヤっちまおうぜっ」

男「よし、やるぜ？」

勇んでゆりつぺの脚間に入ろうとするヤツを俺は慌てて止めた。

俺「ちよつと待てよっ！」

俺の剣幕に多少面食らった様子でヤツが立ち止まる。

男「あ？ 何？ ・ ・ ・まさか今更怖気づいたなんて言うなよ」

・ ・ ・確かに今更なんだが、ここから先はやっぱりマズインじゃ？  
今からするのは強姦だろ？ もしバレたらどうするつもりだ ・ ・ ・  
触ったり舐めたりするのは次元が違うように思うのは俺だけか？

・ ・ ・ヤツを止める？ やはり今更？ どうやって止める？

俺もやるチャンスなのに？ 力づくでも？ こんなチャンスはもうない？  
腕つぶしに自信がないのに？ 今を逃したら一生ヤれない？

考えが纏まらず言葉が出ない俺を見てヤツが思い至ったように言う。

男「わかったっ、俺が先なのが嫌なんだろ？」

ヤるとなればそれもあるが、今はそれ以前に ・ ・ ・

男「しよがねえなっ、ジャンケンするか」

強引に進めようとするヤツに俺は、

1 俺「そうじゃない、これ以上は止めると言ってるんだよっ！」

2 俺「わかった ・ ・ ・ジャンケンしよう」



やはり欲望には抗えない、  
ゆりっぺを抱けるチャンスは今しかないと思うと拒否できなかった。  
このジャンケンは一世代の大勝負になる、負けたくない。  
必勝の気構えで挑んだ結果・俺は勝った！

男「ちっ、オマエの勝ちだ。先にヤッていいぜ」  
ゆりっぺの尻を掴み上げてヤツが言う。  
男「ほら、後があるんださっさとプチ込め」

すっかり準備の整った股間が  
俺に向けて突き出される。  
ヌラヌラとした艶かしい輝きが  
俺を誘っているようで  
否応なく興奮したが・

俺「……………」  
ヤツと違い少なからず罪悪感を感じている俺は  
いざとなつて怯んでしまっていた。  
動けない……………この期に及んで俺はチキンだ・





立ち竦む俺にヤツは痺れを切らした様子だ。  
男「ビビッてんのか？ しょうがねえな、オマエはじっとしてろ」  
嘲笑混じりに俺を押し倒してゆりつぺが跨る体勢をつくる。

ヤツの態度に少しムカついたが素直に従うことにした。  
自分で動けなかったのだから意地を張っても仕方がないだろう、  
何よりここで争ってヤツに先を越されることだけは避けたかった。



挿入れやすいように手を添えて宛がうと  
俺の亀頭がゆりつぺの小陰唇に包み込まれた、  
亀頭から伝わるヌルヌルした感触が溜まらなく気持ちいい。  
これだけでイッてしまいそうなのを何とか堪えるが  
早々とガマン汁が出ているだろう。

ゆりつべの身体が徐々に下げられる、  
それに従って俺のモノが彼女の内壁を押し分けて侵入していく。  
濡れてはいて膣内は狭くまだ潤滑とは言えない状態。  
分け入る毎に包皮が引っ張られて強い刺激が走る、  
無理矢理包皮を剥かれているような感覚だ。



俺「っ・う・う・う・」

主導権を握られ自分で加減ができない。

強過ぎる刺激に思わず腰を揺する、額からは汗。

半分くらい挿入ったところでヤツが動きを中断させた。

男「どうだ、気持ちいいか？」

ニヤついている、どうやら俺の反応を見て楽しんでやがるようだ。  
・無様な姿は晒したくないが格好を付ける余裕がない。

ゆりつべの身体が更に下ろされ、  
俺のモノは根元まで彼女の膣内に埋没する。



動きが止まり刺激も和らいだことで思考が回復する。  
ついに挿入れてしまった。  
ゆりつべとセックスするなんて夢でしかないと思っていたが  
.....  
俺と完全に繋がった状態になっている彼女をまじまじと見る。

## ※ 自己イメージ

唐突だけど  
あなた入隊して  
くれないかしら



俺がこの世界に来た時は記憶も曖昧で  
混乱からどうしていいのか判らないような状態だった、  
そんな俺に声を掛けてくれたのがゆりっぺだ。

初めて出会った時のことがフラッシュバックする。

## ※ 自己イメージ



ようこそ  
我が戦線へ  
歓迎するわ

・ゆりっぺが俺を導いてくれた。

多少口が悪くても気さくな性格から皆に好かれるタイプ、  
ゆりっぺと愛称で呼ばれているのも皆から親しまれている証だろう。  
勝気などころも頼れるリーダーといった感じだ。

俺はそんな彼女に憧れた、彼女と共に活動することが  
この世界での生きがいと言ってもいいくらいだ。

正直に言うと俺は出会った時からゆりっぺが好きだった、もちろんセックスもしたかった。

しかし俺以外にもゆりっぺに好意を持つ男は多く、リーダーの彼女と裏方の俺では接する機会すら少ない。

そもそも恋愛に興味を持っていない素振りすらない彼女を抱くなんて夢でしかないと諦めていたが、

まさかこんな状況で夢を叶えてしまうなんて・

男「へへ、どうだ？ゆりっぺの具合は」

ヤツがゆりっぺを上下させると当然だが気持ちいいっ、

俺のモノが彼女の内壁で擦られてソクソクするほど気持ちいいっ、

さっきまでの薄っぺらい罪悪感やネガティブな思考など


簡単に吹き飛んでしまうほど気持ちいいっ！

この快感の前ではアレコレ考えることがバカらしく思えてくる。





ここまでやってしまったら後はもう楽しむしかない、  
腹を括った俺は力強くゆりつぺの腰を掴んだ。



男「お、ゆりっぺは処女だったようだな、血が出てるぜ」  
ヤツの実況は俺を喜ばせた、そうだとすれば素直に嬉しい。  
気分が盛り上がり興奮が更に高まる。

ゆりっぺの腰を上下させる。

いちど奥まで挿入したことで潤滑さが増した膣内は硬さがとれて適度な締め具合になった、優しく包み込むように密着してくる内壁がヌルヌルしていて溜まらなく心地いい。

膣内の感触を味わうようにゆっくり動かすと細かい突起が敏感な龟头を刺激してくる、こそばゆいようでムズムズした感覚が龟头から下腹部まで伝わり腰が震えるほど気持ちいい。



気持ち良さで無意識のうちに腰が浮き上がる、俺はゆりっぺの腰が跳ねるほど激しく突き上げた。射精したい感覚が一気に増してくる。





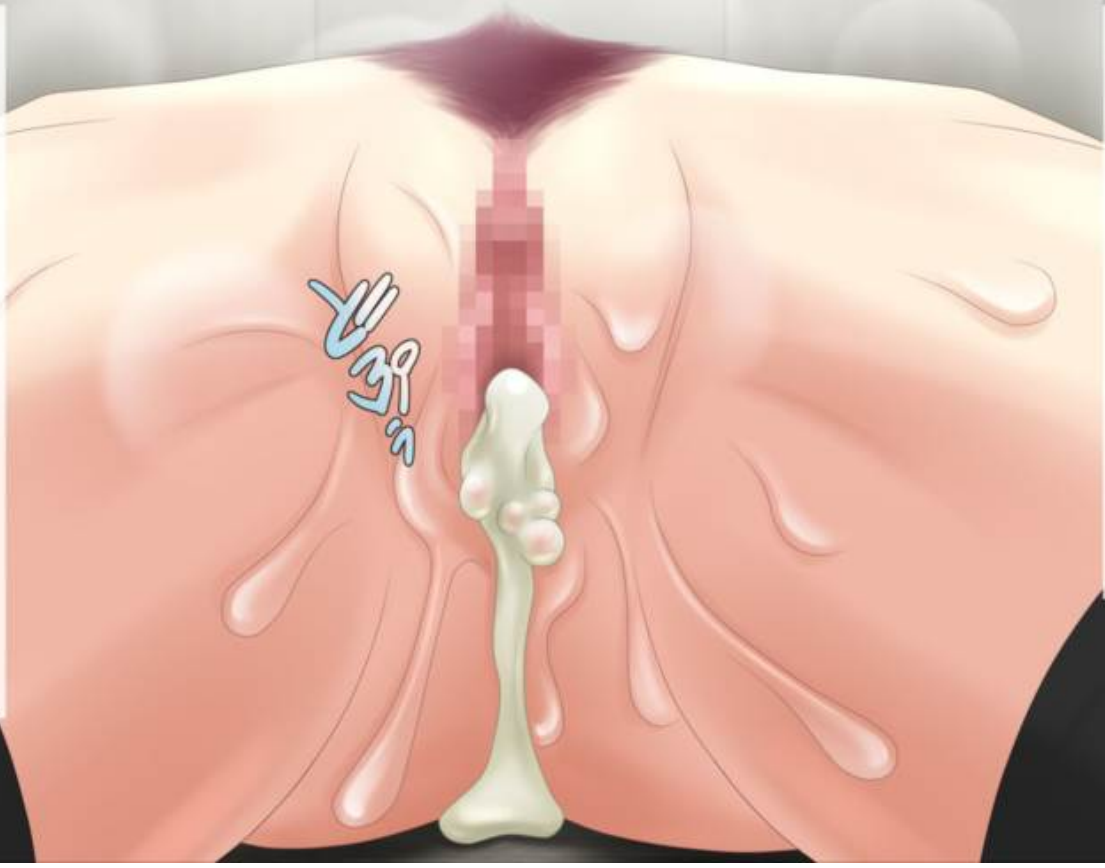
射精を我慢するのも限界に近づいた俺はゆりつべを強く抱き締めた、  
素肌同士を密着させてキスをする。  
興奮が最高潮に達する、もう限界だ。

出るっ！

ゆりつべを一層強く抱きしめた俺は彼女の膣内にザーメンをふち撒けた。



今まで生きてきた中で・・・いやもう死んでるが、  
とにかく一番気持ちいい瞬間だった。



もっと余韻を楽しみたかったがヤツが急かしてくる、  
俺は洩々ゆりっべからイチモツを引き抜いた。  
栓を失った彼女の膣からは俺のザーメンが溢れ出している。



男「うわ、大量に出しやがったな、  
初めからこんなにドロドロじゃ挿入れる気にならねえぜ」  
俺に支えさせてヤツがゆりっぺの膣からザーメンを掻き出している、  
まんぐり返しのような格好でザーメンを掻き出されている彼女は  
とても間抜けに見えた、普段の凛々しい姿からは想像もできない格好だ。

射精後の悟りタイムで冷静になった俺は今更ながら  
とんでもないことをしてしまったのではないかと考えていた。  
処女であったことも行為中は嬉しく思ったが  
冷静になって考えてみるとより罪深くなってしまったのかもしれない、  
ゆりっぺにこのことがバレたら彼女は絶対に許してくれないだろう・・・


俺は慌てて服を着る、  
もう一刻も早くこの場を立ち去りたい気分だ。



ザーメンが拭き取られたのを見て俺は少し安心した。

ヤツは彼女の下着を使ってザーメンを拭い取った。






口にはしないが、ヤツがゆりっべを犯すところなんか見たくもない。  
自分がやった後でこんなことを思うなんてそれこそ身勝手か・・・

男「挿入るぜ、ちゃんと見てるか？」  
俺の身勝手な考えを察したのだろうか？  
どうやらヤツは自分の行為を俺に見せ付けたいらしい。

俺のゆりっべに対する並々ならぬ心情は理解してるだろう？  
なのに見せたいのか・・・まったくいい性格してやがるぜ。



腰が突き出されヤツのモノが深々と挿し込まれる、  
ゆりっぺは何の抵抗もなくそれを受け入れた。  
男「くく、適度にほぐれていい感じだぜ」  
俺の時とは違い非常にスムーズで拍子抜けするほどあっけない。

自分がやった後ただけに寝取られるような気分を感じたが  
これもゆりっぺからすれば身勝手極まることだろう。



男「いつも偉そうに命令してやがるが・はは、  
こうやってプチ込んでみるとただの女だな、  
なあ、オマエもそう思わなかったか？」  
かわいいもんだぜ。



俺「・・・」  
ゆりっぺを侮辱してるのか？  
少しムツとする、俺にとってゆりっぺが月並みな女なわけがない。



ヤツは緩急をつけて自らのモノを出し挿入れさせている、結合部を覗き込んだヤツが言った。とても気持ちいいのであろうか、見ているだけでわかる。

男「お、また血が滲んでるぜ、処女膜も再生してるのかもな」  
結合部を覗き込んだヤツが言った。  
なるほどこの世界ならあり得るか・・・  
俺はちょっと悔しいような安心したような複雑な心境だ。



体位を変えたヤツは互い股間を合わせてぐりぐりと擦り合わせる、  
限界まで深く挿入しようとしているようだ。  
強く密着した股間から湿り気を帯びた淫猥な音が漏れ出している。

次々と体位が変えられる。  
今度は腰を掴まれバックから責め立てられるゆりっぺ、  
腰を叩きつける衝撃音があたりに響く。

パン  
パン  
パン  
パン

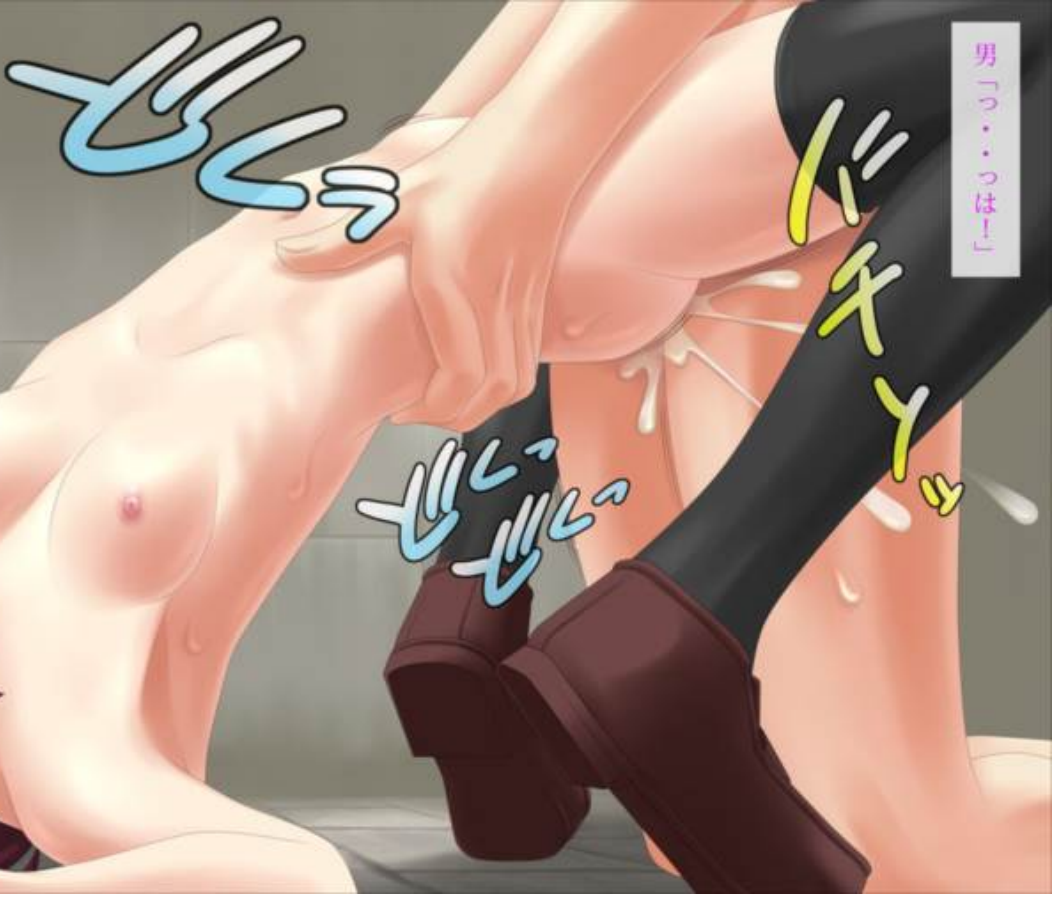
ヤツは様々な体位でゆりっぺの肉体を堪能している、  
それに比べて俺はがむしゃらに突き上げるだけで終わってしまった。  
今更ながら勿体無いことをしてしまったような気がしてくる、  
俺に余裕があればもっと楽しめたかもしれない・・・





男「はあ、はあ、いいぜ、  
気持ちいいぜゆりっべっ！」  
ヤツの息遣いが荒くなりはじめた、  
動きもペースアップしてきている。

男「ただの女なんて言ったのは訂正してやる、  
この挿入れ心地はサイコーだっ、はあ、はあ」



ヤツの動きが止まった。

ひと際激しく打ち付けた腰が  
びくびくと震えている、  
フィニッシュしたようだ。

俺もそうだったが膣内出した。  
考えてなかったが

妊娠したりしないだろうか・  
いや大丈夫だろう、  
歳もとらないこの世界では  
妊娠などしないはずだ。

男「くはあっ・・気持ちよかったっ」

ヤツが豪快に腰を引くとイチモツが跳ね上がり  
ザーメンが周囲に飛び散った、  
射精したにもかかわらず硬さを失っていないようだ。



二人してゆりつべを犯してしまった・  
しかしこのまま放置していくのはマズイか？  
服を着させておくべきだろうか？

とにかく早くここに立ち去る準備をするように促すが  
ヤツは呆れた表情で俺を見ているだけで動こうとしない。

男「オマエもう満足したのか？ まだ一発しかしてないだろ」

ヤツは何を言ってるんだ、早く去らないとヤバイだろ？  
満足かどうか以前にもう時間が相当経っているはずだ、  
回復が早ければゆりつべが目覚めてもおかしくないんだぜ？

男「これからが本番だろ、もっと楽しもうぜっ」

俺「バ、バカ言うな、もう時間的にヤバイって！」  
ゆりつべが目覚めたらどうするんだ、続けるなんて危険すぎる。





男「大丈夫だって、俺に考えがあるから安心しろよ」  
俺の心配などお構いなしでヤツは再びゆりつべに手を付け始める。

男「へへ、次はケツの穴を試してみるか」  
どんな考えか知らないが、オマエの巻き添えになるのはご免だぞ？  
それにケツって・・・マジなのか？



男「よし、第二ラウンド開始ってな」

ヤツは笑いながらゆりつべの肛門に捻じ込んでいく。  
しかし実際は現実味に欠ける行為のように思っていた。  
だって挿入られる方は痛いだろ？・たぶん。

ズン

じギョウ...

ヤツが調子に乗って無茶なことを始めたとき  
ゆりつべが顔をしかめて微かに呻き声をあげた。

っ...  
痛っ

今までになかった反応、まさか目覚めた!?  
恐れていたことが現実となり  
俺は一瞬硬直したが慌てて声を掛ける。  
俺「おいっ、ヤバイ！」



完全に目覚めているヤバイ、ヤバすぎる！  
しかしこの緊急事態にもかかわらず  
ヤツに慌てた素振りはなく行為を止めようともしない。

びん

ぬはあああつ！

痛っ・・・っっ！



いきなりの苦痛にもぐくゆりっべ、  
自分の身に起こっていることを確認する為に  
振り返ろうとする。

な、何？



ゆりっぺが振り向こうとした瞬間、  
ヤツが手を伸ばして彼女の首を掴んだ。  
俺「！・・・」

うくっ  
うくっ  
!?

ぐっ  
ぐっ

!!





うぐうっ・  
っ!・っ!  
っ!

うっ!

うっ!

ううう

あぐああああ．．．つ

アアアア

あぐああああ

俺はどうにも動けず、ヤツの暴挙をただ呆然と見ていた。



やっちまいやがった・  
ゆりっぺの両腕が力なく垂れ下がり白目を剥いて痙攣している、  
・完全に落ちて失神状態だ。

ヤツの言っていたかえってのは強引に気絶させることだったのか？  
俺「なんてことを・・・」

男「別に最初の状態に戻っただけだろ、

要は顔さえ見られないように気を付ければいいってことだ」  
俺は呆気にとられたがヤツは事も無げな様子だ。

いくら死なない世界であることが前提にあるとしても、  
ここまで大胆なことをしやがるとは・・・  
その大胆さをもっと戦線の活動に役立てると言ってやりたい。





首から手が離され力なく崩れ落ちたゆりっぺ、  
ヤツは膣と肛門に代り番で挿し込み感触の違いなどを楽しげに語っている。



こんな非道な行いは許されるものでないだろう、しかし・・・  
それを見た俺は極度に興奮していた、思わずズボンに手が掛かる。



服を脱ぎ捨てた俺はゆりつべに近づき手を伸ばす。  
男「はは、オマエもヤル気が復活したか？」  
ヤツの行動を見逃している時点で俺も罪を重ねてしまっただろう、  
こうなったらヤツだけが楽しむのは納得できない。

何よりも彼女の苦悶の表情が  
俺の嗜虐心に火を点けてしまった。  
・もつと滅茶苦茶に犯したい。  
彼女に対する想いも火に油を注ぐ結果となり  
性的快感を求める欲望が罪悪感を忘れさせていく。



順番を待ちきれないほど興奮している俺の様子を見てヤツが言う。  
男「ほら、前を空けてやるからこっちに挿入れな」

もう何も考えない、行為の異常性も気にしない、目の前に穴があるから挿入れる。



さすがに二本同時はキツかったようで、ゆりっぺが低い呻き声を上げた。刺激が強過ぎて逆に意識を取り戻したか!?

ヤツが素早くゆりつべの首に手をやる、とても機敏な動作だった。調子に乗り過ぎたかと思ひ肝を冷やしたが助かったようだ、まだ目の焦点が定まっておらず顔を認識されることもなかっただろう。



首を絞められた彼女の膺は締め付けがハンパじゃなかった、こちらが力んで押し込まないと押し出されてしまいそうだ。

俺とヤツのモノがゆりっぺの膣内で激しく擦れ合っている、  
強い締め付けでキツキツの膣内を抜き挿しすると堪らなく気持ちいい。  
ギンギンに勃起した二本に上下から貫かれた彼女の腰は宙に浮くような状態になっている。




ゆりっべは焦点を結ばない濁った目で俺達にされるがまだ、通常外のセックスで食る快樂は凄まじい。



興奮と快感で頭の中が真っ白になっていく、もう何でもいい、とにかく気持ちいい、もっともっと気持ちよくなりたい。

じゅわん  
じゅわん

ぷんちゅちゅ



体位を変え、穴を変え、俺達は欲望の趣くままにゆりっぺを陵辱し続ける。  
普通では無理そうな体位でもお構いなした、  
もし彼女に意識があればとても耐えられるものではないだろう。

いくら相手が失神していても現実世界であれば俺はここまでは出来ないだろう、  
身体の負担を考えなくていいこの世界だからこそタガが外れてしまっていた。



陵辱を続けるうちにゆりつべが四肢をバタつかせて細かく震えだした。  
やがて大きく身体が跳ね小刻みな痙攣に変わっていく・  
そんなことが数回繰り返される。

ズゴッ  
ズゴッ  
ズゴッ

びん

びん

男「おっ、ゆりつべのやつイってんじやねえか？」  
苦悶とは違う震え方、気持ちいいときの震えに見える。  
乳首もピンピンに起っている、これは性的に絶頂している!？」

男「うはっ、小便漏らしやがった、こりや間違いないくいつてるぜ」  
太ももがゆりつべの小便で温かくなる。

どうやらゆりつべの肉体にも性的刺激が蓄積されていたようだ、  
何度か覚醒したことで絶頂に繋がったのかもしれない。  
本来であればイってもおかしくないほど責め続けているだろう、  
彼女に意識がない状態なので期待してなかっただけだ。

ぷんぷん...

ニクニク

ブホッ



激しく突かれて絶頂が治まらない様子のゆりっぺ・・・  
覚醒しているのかどうか判別し難い感じになっている、  
酸素が足りずに朦朧としている状態なのかもしれない。  
彼女にとっては夢(悪夢)でも見ている感じだろうか？



彼女がイクことで俺の興奮が更に高まる。  
ゆりっぺが俺とセックスして気持ちよくなってきていたのだ、  
もちろん彼女はそんなこと望んでないだろうがそれでも嬉しい。



俺はゆりっぺの頭を掴んで彼女の口に荒々しく捻じ込んだ。  
今なら何をしても彼女が喜んでくれるという錯覚すら覚える、  
それが錯覚とわかるあたりがギリギリの残った正気といったところか。

口内は上顎や歯など硬い部分もあり膣とはまた違った刺激がある。  
フェラチオしてもらうのとは少し違うだろうが  
ゆりつべに奉仕してもらっていることを想像した俺は  
緩急をつけて気持ちよくなれるよう自分勝手に腰を前後させる。



意識を失っている彼女の口からは涎が止め処なく溢れ出し  
とても潤滑だ、歯の当たる感触も適度な刺激で気持ちいい。

快感が増すにつれて腰の動きが大きくなり、激しく喉奥まで挿し込む。深々と挿し込まれる度にゆりっぺが苦しそうな呻き声を上げている。意識の有無は不明だがこの体勢なら顔を見られることはないだろう、気にせず続行する、どんどん大胆になってきている。

ぐほももっ

んぐうっ

んぐぐぐう・  
うぐう、うぐう

彼女の苦しげな様子などお構いなしで腰を振る、息継ぎもさせずにただひたすら自分の快感だけを求めている。とんでもなくサディスティックな行為だがこの世界ではどれだけ激しくしても彼女にダメージが残ることがない、そんな安心感が俺に狂った行為をさせている。

俺「ぬはっ、イ・くっ！」  
口内喉奥で射精する、ゆりっぺに俺のザーメンを飲ませたい。



大半のザーメンは吐き出されたようだが  
一部は彼女の胃まで届いただろう。

続いてヤツが彼女の肛門に射精する。  
ゆりっぺも同時にイったようで硬直した様子で震えている。  
俺が酷使した顎は痙攣して歯がガチガチとなっている、  
引き撃った口元は笑っているかのように見えてちよつと怖い。



ゆりっぺは三穴全てで俺達のザーメンを受け止めたことになった。



絶頂後にだらしなく脱力するゆりっぺ。  
白目を剥き三穴からザーメンを垂らして余韻に震える、  
その姿は節操のない淫乱女といった感じに見える。



戦線のリーダーで俺が異性として憧れる存在・・・  
普段の彼女を思い浮かべてオーバーラップさせてみると、  
その変わり様に驚嘆すると同時に言い知れない卑猥さを感じた。



ヤツがゆりっぺの肛門を抉じ開けて覗き込んでる。  
男「へへ、たっぷり出してやった、奥に溜まってるぜ」



肛門を広げて覗き込まれるなど  
女性として耐え難い恥辱だろう。

あり得ないほど屈辱的なポーズを強いられるゆりっぺ、  
その光景が俺の嗜虐心に再び火を付ける。

俺も加わり今度は膣を広げて覗き込む、  
流れ出すザーメンが邪魔だったが子宮口まで見ることができた。



ヤツはクリトリスを弄んだあげく千切れんばかりに引っ張っている。

強い刺激でもがいているが相変わらず目の焦点は合っていない、自分が何をされているか認識するほどの意識はないだろう。



昔見たSMビデオを思い出し出しコブシを捻じ込んでみる。  
大きいモノを挿入すればより強い快感を与えられるかもしれない。  
ただでさえ小ぶりなゆりっぺの腰にコブシは大き過ぎる気もしたが  
指を数本伸ばして細めれば何とか挿入できそうだ、  
無茶な行為だが繰り返し挿入でほぐれきった膣に抵抗は少ない。

グリグリ動かすと同時に指先で内壁を擦ってみると大量の潮が噴出した、彼女の肉体が快感を感じているのが判りやすく見て取れる。度を越えた責めで普段の彼女なら受け入れ難い屈辱的行為のはずだ、思った以上に素直な反応をして楽しませてくれるのは、半気絶状態で彼女に精神的抵抗がないのが影響しているに違いない。

おっ…あが…  
……………



再び意識が完全に飛んだようだが身体は激しく反応し続けている。



勃起状態が回復した、次は俺も肛門を試してみる。

口にヤツのモノを咥え串刺し状態のゆりっぺは  
クリトリスを荒々しく掴み上げられ激しく痙攣している・・・  
やがて身体が跳ね上り小便混じりの潮が吹き出る、大きく絶頂したようだ。  
彼女はどんどん敏感になっているようで反応も大きくなっている、  
尋常じゃない程の勃起状態を続けている乳首とクリトリスは肉体的興奮の証だ。  
ゆりっぺの身体が快楽に震えている・・・やべえ、楽しい、もっとイかせたい！！

意識が完全に戻ることを防ぎながらの陵辱。  
絞めては挿しての繰り返し・まったくもって悪魔の所業だが  
利己的な欲求が満たされることで考え方まで歪んできた、  
もう正常な判断ができてない。  
肉体的ダメージを考慮しないでいいこの世界で  
彼女にとっても快感なのだからいいではないかとさえ思えてくる。

かかかかかかかか

ちんぽ

彼女の意思を無視した狂宴が続いている・・・



テンションの上ったヤツはゆりっぺの頭を踏み付け暴言を吐いている。  
男「このメス豚がっ！ いつも偉そうにしてやがるくせに  
下っ端に犯されていきまくってるじゃねえぞっ、  
オマエなんか俺達の肉便器がお似合いだぜっ、なあ？」

ゴリッ

ズキッ  
ズキッ  
ズキッ

余程不満が溜まっていたのか、それとも下っ端なのが嫌なのか？  
ゆりっぺを卑下する言葉が多くなってきたのは少しいただけないが  
俺は反論しなかった、今はヤツの不満などどうでもいいのだ、  
ただひたすら快感を貪り彼女の身体を楽しんでいる。







男「この舌でいつも無茶な命令ばかりしやがるんだぜっ、引き抜いてやろうかっ、はははっ！」

ヤツの行動が感染したのか俺も無意識でサディスティックになっている、彼女の乳首を喰い千切ってしまいそうだった。どんどん狂ってきている感じがして自分でも少し驚いた。



狂っていること自覚しても止められない、止めたくない。  
とにかく気持ちいい、ゆりっぺの身体も気持ちよさそうに震えている。  
意識はないが彼女も本当は悦んでいる、そう思い込みたい俺は  
単純に陵辱しているヤツよりも更に歪んでいるのだろう。



おおっ・おおっ・おおっ

男「おらおらっ、もっといきやがれこのメス豚があっ!!..はあ、はあ..  
どうだっ、はあはっ、気持ちいいかっ? 気持ちいいんだろっ!!  
はっ、ザーメン下さいって言うてみろよ、ああっ..はあ、はあ、はあ..  
もうオマエなんて肉奴隷だっ..はっ、はっ、二度とリーダー面すんなっ  
..はあ、はっ、オレにやられていきまくってりゃいいんだよ!!」

俺「はあ、はあ..ゆりっぺ..はあ、はあ..はあ、はあ..ゆりっぺ..  
はは、はあ..ずっと..はあ、はあ..好きだった..はは..  
ずっとだ..はあ、はあ、抱きたかった..はあ、はあ..ははは..  
はあ、はあ..んはっ..んん、ん、ん..おう..ゆりっぺ..  
..はあ、はあ..んぐ..はっ、はっ..はふっ..はっ、はっ」

グッ  
グッ

んっ  
んっ

んっ  
んっ

ガリッ

ドクドク

興奮が最高潮となり俺とヤツが同時に射精する。  
ヤツの存在を忘れかけるほどに没頭していた俺は  
自分勝手に腰を振っていただけが偶然にも高まりが重なったようだ。  
高まりはゆりつべも同じだったようで三人同時に絶頂した、  
視界がぼやけて頭の中が真っ白になるほどの快感だ。  
三人まとめて感電したようになり、  
しばらくの間は全身に広がる震えが止まらなかった。

パチーン

どくどく  
どくどく

ガクガクガク

ぷびゃあおおあつ!!



俺達から解放されたゆりっぺが床に崩れ落ちる。  
彼女の快感はまだ治まらないようで全身が痙攣したまま、  
股間からはザーメンが溢れ出している。



とてつもなく気持ちよかった、  
これほどの快感はもう味わえないかもしれないと思うほどだ。

たっぷり出して満足と言いたいところだが・・・  
その後も俺は陵辱を止めなかった、  
三度の射精で感覚も鈍くなっていたがそれでも続けている。  
止めるのが惜しくなっていたのだ、  
もうこんなチャンスは二度とないと思うと止められない。



啜えさせてももう勃起しない様子のヤツは  
呆れ顔でくつろいでいる。



ゆりっべの性器と肛門はもう腫れ上がっている。  
俺の方も勃起状態を維持するのが難しくなっていたが  
強引に抜き挿しするうちにある程度の硬さを保てるようになった。  
高まりも感じる、これならもう一発出せそうだ。



無理矢理気持ちを高めて渾身の射精!!  
ここまで出来るのは相手がゆりっべだからこそだ。



俺「はぁ・・・はぁ・・・はぁ・・・はぁ・・・はぁ・・・」  
本当に最後の一滴まで搾り出してやった・・・  
目眩がして股間はジンジンしている、もう出ない、勃起する様子もない。



これだけやればもう悔いはない、あとはこの場を立ち去るだけだ。  
俺は手早く服を着て身支度をする。



去り際にヤツがゆりっぺの下腹を踏み付けた。  
体内に溜まったザーメンをもっと溢れ出させたいらしい、  
最後まで非道いことをしやがる・・・

男「うわ、靴に付いちゃった。最後までたくさん出しやがって、  
結局オマエの方が俺より楽しんだようじゃねえか」

小バカにされても返す言葉がない、とても気持ちよかった。

変わり果てた姿にさせてしまった・・・

このまま放置することに抵抗はあったが  
何度か意識が戻ったのだから行為自体の隠蔽は無理だろう、  
顔を見られていないことを願うだけだ。



もう興味が薄れた感じでヤツは足早に立ち去っていく  
・・・俺も後を追ってこの場を立ち去った。

••END





そうだわ・・・  
ヤられたっ!!

こんなことする  
ヤツが居たなんて  
・・・  
ちっ、油断した!

っっっ  
これって

むくり

男「よし、やるぜ？」

勇んでゆりつぺの脚間に入ろうとするヤツを俺は慌てて止めた。

俺「ちよつと待てよっ！」

俺の剣幕に多少面食らった様子でヤツが立ち止まる。

男「あ？何？・まさか今更怖気づいたなんて言うなよ」

・確かに今更なんだが、ここから先はやっぱりマズインじゃ？  
今からするのは強姦だろ？もしバレたらどうするつもりだ・・  
触ったり舐めたりするのは次元が違うように思うのは俺だけか？

・ヤツを止める？やはり今更？どうやって止める？

俺もやるチャンスなのに？力づくでも？こんなチャンスはもうない？

腕つぶしに自信がないのに？今を逃したら一生ヤれない？

考えが纏まらず言葉が出ない俺を見てヤツが思い至ったように言う。

男「わかったっ、俺が先なのが嫌なんだろ？」

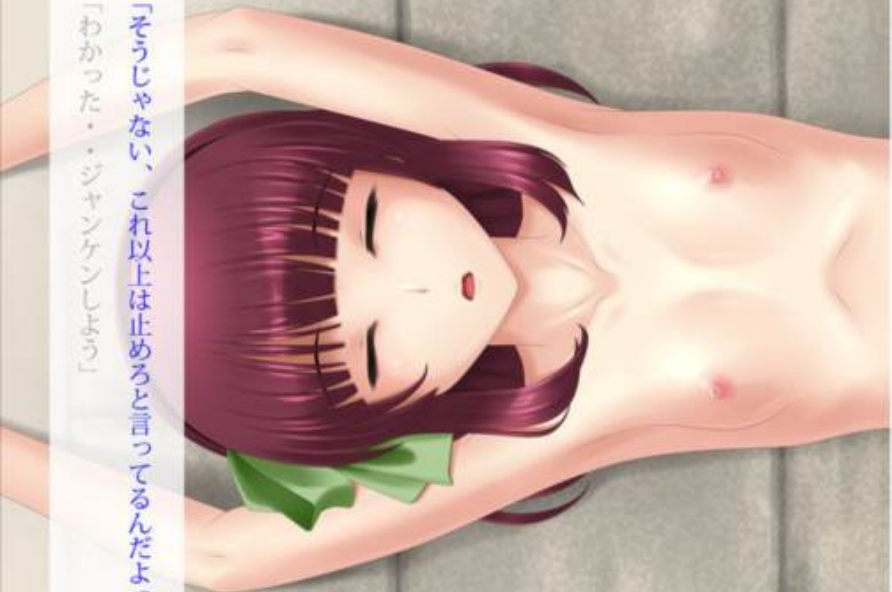
ヤるとなればそれもあるが、今はそれ以前に・・

男「しよがねえなっ、ジャンケンするか」

強引に進めようとするヤツに俺は、

1 俺「そうじゃない、これ以上は止めると言ってるんだよっ！」

2 俺「わかった・ジャンケンしよう」



ヤツを止めようとした途端、俺の視界が赤く染まった。  
置む視界で目を覆らしてみると  
ヤツの手にはサバイバルナイフが握られている。  
男「邪魔はさせないぜ、オマエは暫く死んでてくれよ」

俺はブラックアウトした・・・



不明な時間が経過して・・・俺は目覚めた。

傍らにはゆりっぺが倒れている、まだ目覚めてない。  
俺の方が早く復活したのは傷の度合いか？ 個人差か？  
それはともかく、全裸のまま放置された彼女の股間からは  
ザーメンが流れ出している・・・やられちゃったようだ。



ヤツの姿は見当たらない、もう満足して去ったのだろうか？  
まったくもって納得できない結果となってしまった。

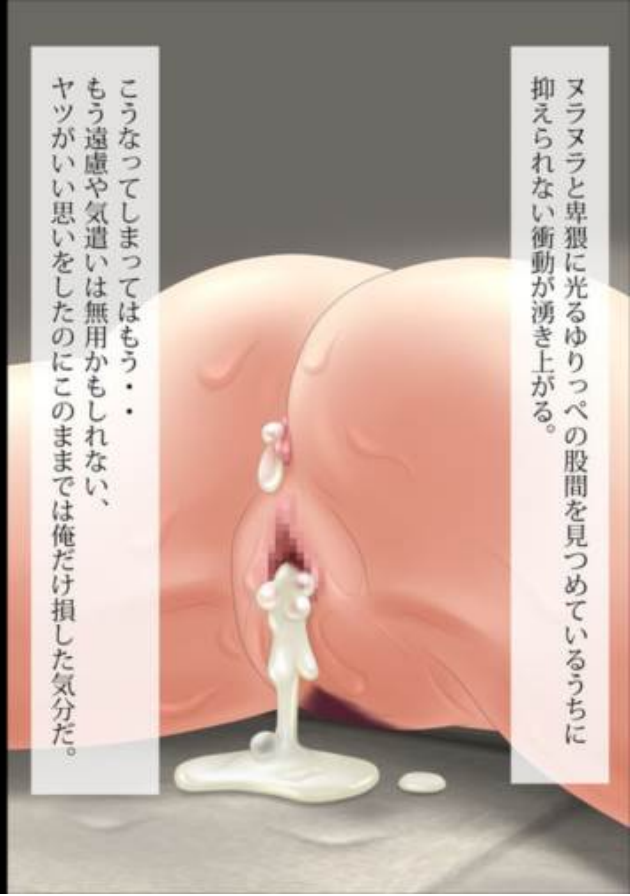


ヌラヌラと卑猥に光るゆりっぺの股間を見つめているうちに抑えられない衝動が湧き上がる。

こうなってしまうってはもう・・・  
もう遠慮や気遣いは無用かもしれない、  
ヤツがいい思いをしたのにこのままでは俺だけ損した気分だ。

俺もやってしまおうか・・・

ゆりっぺの股間を見つめたままスポンを摺り下ろす。



しかしその時、ゆりつぺが意識を取り戻したっ!?

んん  
んん  
んん?



性欲に駆られて彼女が目覚める可能性を失念していた・  
俺は予想外の展開に動揺する、身体が硬直して動けない。

勢い良く身体を起こしたゆりつべと視線が合う。



彼女の視線が下がり俺の勃起した股間を凝視している。

俺「.....」



俺「あ・・・これは・・・その・・・俺じゃなくて」

動揺してしまつてうまく説明できない、  
そもそもこの状況で説明して納得してもらえるのだろうか？  
だがこのままじゃマズイ、何とか言い訳しないと・・・

怒っている!?・・・当然だろう、最悪の展開だ。



これは  
・・・

どういうこと  
なのかしら？



問答無用の金的攻撃を喰らった俺はもんどりうって倒れ込む。

しかし彼女の怒りがこの程度で治まるはずもなく、  
ぶりぶりした様子で俺にとって致命的な言葉を浴びせる。



アンタは  
除隊よっ!!

この状況まで追い詰められた俺は妙に落ち着いてしまった。  
怒っているゆりっぺもまた可愛い・・・  
こうして蹴られるのも悪くない・・・などと考えている。  
俺はマゾヒズムに目覚めてしまったのだろうか。





てか、  
見るなっ!!

!

な、何にも  
ないわよっ!

なっ、な、  
何があった...

ぐはあっ!!

ゆりっべっ  
無事かあ  
...?



この度は、お買い上げくださり誠にありがとうございました。

いかがだったでしょうか?  
ご感想等をホームページにお寄せいただけると嬉しいです。

次回作も是非よろしく願いたします。m(\_ \_)m

**オソマツサマ** でした。  
<http://osomatsusama.sakura.ne.jp/>